

草庵仏教

第196号
(発行日)
2006年10月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)
63-4488
(発行人) 土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://www.eonet.ne.jp/~souan

《聞法会ご案内》
○〈同朋の会〉
毎月22日午後2時
.....
○〈念仏座談会〉
毎月2日および12日
午後3時より。
○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。
*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

真宗問答(一一七七) 願心より発起する信心

K 「第十八願のお話を聞かせて
いただいています。第十八願
は

たとひわれ仏を得たらんに、十
方の衆生、至心信樂して、わが
国に生ぜんと欲ひて、乃至十念
せん、もし生ぜずは、正覺を取
らじ。ただ五逆と誹謗正法とを
ば除く。

です。それ
で至心信樂して、わが国に生ぜん
と欲ひて

というのは阿弥陀仏が私たちに
どうか念仏の誓いを信じて助か
ってくれよという大悲心を表さ
れたものだとお聞きしました」
D 「ええ。法蔵菩薩様は十八願
に

〈至心に信樂して我が国に生ま
れんとおもえ〉と喚びかけてお
られるのですが、至心にとはこ
の誓いで間違いなく助かること、
信樂とはこの南無阿弥陀仏で助
かることに疑いないという仏の
お心、我が国に生まれんとおも
えとは、この南無阿弥陀仏で浄
土に生まれさせるから生まれる
ことができるとおもえとの仏の
お心でありましょう。すなわち
至心信樂欲生我國はへどうか念
仏の誓いの願力によって間違い

なく疑いなく助かるから、どう
かこれを信じて浄土に生まれる
とおもうてくれよ」という仏の
大悲心なのでありましょう」

K 「けれどもこの念仏の誓いを
信じることがなかなかできない
です。どうしたら誓いを信じ
られるのですか」

D 「聖人は、こうしたら信じら
れるとおっしゃっています。
信心を起こしようもない出離の
縁なき私どもに、信心はご本願
の方から我らに与えられてくる
との仰せであります。すなわち
信巻に
信樂を獲得すること、如来選
択の願心より発起す。
とか

この心すなわちこれ念仏往生の
願より出でたり。この大願を選
択本願と名づく。
との仰せであります」
K 「信樂を獲得することは、如
来選択の願心より発起す。
との仰せですが、この文の意味
がよくわかりません。信樂を獲
得するというのは信心を得ると
いうことですね」
D 「ええそうです。信心をいた
だくことです。真実の信心は私

どもの心の中から起こし
得るものではなく、如来
様からいただくものだと
の仰せです。たとえ私ど
もの心から起こしたとし
てもそれは凡夫の心です
から、それが因となって

仏になることはできない相談で
す。仏になる因は仏と同質のも
のでないと仏になれないのであ
り、仏になる因としての信心は
仏心であるとお聞きしています」
K 「そういう信心をいただくの
は、如来選択の願心からいただ
くものなのですね」
D 「ええそうです」

K 「では如来選択の願心とはな
にですか」

D 「それは如来法蔵様が一切衆
生を平等に浄土に生まれさせて
仏になしてやりたいという大悲
の願心から、あらゆる仏国の中
から極樂浄土を選びとり、極樂
浄土に生まれる行をあらゆる行
の中から選んで、〈我が名を称え
るばかりで浄土に生まれさせよ
う〉と誓いをかけ、念仏を私た
ちに与えて救おうとされる、そ
の大きいなる大悲の願心でありま
す」
K 「浄土に生まれる行を称名念
仏として選び取って、念仏でも
って浄土に生まれさせようと誓
われた、そのお心が選択の願心
なのですね」
D 「ええそうです。ですからこ
の願を念仏往生の願といい、選

択本願というのであります。こ
の選択本願の願心こそ絶大なる
大悲の心ですから、この選択の
願心聞きまして念仏すると
ころに、大悲の願心が私に届い
て念仏往生を信じる信心になっ
てくださるのです」

K 「そうすると念仏往生の願を
信じる信心も同じく念仏往生の
願から出てくるのですね」
D 「そうなんです。たとえてい
うと、屋外に出て夜空の月を眺
める場合、月の光を見ることが
できるのは月の光が私の目に届
いて月を見ることができるよう
なものです」

K 「自分の目では月を見ることが
はできないですね。月から出る
光がまず私の目に届いて、それ
で月の光をきれいだなあと見る
ことができるのですね」

D 「ええそのように、本願を信
じる信心も本願から出てくるの
です。念仏往生を信じる信心も
念仏往生の願心から出る願心が
届いて、念仏往生を信じる信心
となつてくださるのです。この
信心が浄土往生の正因なのだ
ということを明確に示されたの
が第十八願の〈至心信樂して・
若し生まれずば正覺を取らじ〉
のお言葉であります」
K 「なぜ、願心が私たちの凡心
に届くのでしょうか」
D 「それは如来の大悲の願心は
私たちの煩惱の心にさまたげら
れず、邪魔されない徳があるか
らです。如来の光明は無碍光で

あり、円融無碍といわれて、私たちの煩惱の心に妨げられずに融け込んでくださるからでありましょう」

*

K「そうすると念仏往生の願心が大悲の心であるから、大悲の心をよく聞くことが大事ですね」
D「ええそうです。念仏往生の願のおぼしめしをよくよく聞くことが念仏の大悲をいただくことになるです」

K「お念仏しつつ、念仏のいわれを聞くのですね」
D「ええそうです。香樹院師が

「そもそもこの念仏は、何のために成就して、何のためにか称えさせたまふやと、心を砕きて思へば、即ちこれ常に称えるのが常に聞くのなり」

と仰せられています。阿弥陀仏は何のために念仏を成就して、私どもに与え、何のために「我が名を称えよ」と申されるのか、そのお心を何度も聞かせていただくのであります」

K「だからお念仏のいわれを聞くことが如来の大悲を知ることになるわけですね」
D「ええそうなんです」

*

K「念仏往生の願のお心を今一度お聞かせ下さい」

D「如来法蔵様は一切衆生が煩惱を離れ、智慧と慈悲の徳が完成した仏になるにはどうしたらいいかを思案されたのです。なぜなら衆生の現実はいつまでも

迷妄と悪業の生を続けていて、いつまでも流転している、その状態を離れられずにいることを悲しまれ、流転の生から解脱せしめたいと願われたのです。如来法蔵様から見られたわれら衆生には清らかな心も真実の心もない、ただ煩惱にもとづいた生活を重ねているばかりで、どこにも仏になる可能性はないことを見通されて、如来法蔵様の力にて一切衆生の罪濁をのぞき仏

にならしめようと願いたたれて、私たちに代わって私どもが仏になるべき修行をされたのです。そして万人を平等に救う力を実現して、私どもに仏になる功徳を南無阿弥陀仏として与えようとされました。そして今ここに南無阿弥陀仏というお念仏とな

って私たちの口に現れくださっているのです」
K「どのようなお心で私たちに臨んでくださるのですか」
D「南無阿弥陀仏と現れて、汝の往生の事は弥陀が引き受け

たからそのまま念仏するばかりでよい、かならず往生せしめるのお心です。それを十八願には**乃至十念若不生者不取正覚**とお誓いくださったのです。」

K「乃至十念若不生者不取正覚」とは、「我が名を称えるばかりで助けろ」という仰せですが、なぜここに大悲のお心があるのですか」
D「それは私たちの心に清浄真実の心がないのを見通して、私

たちに何もこれといったすぐれた心も行いを求められないのです。もし私たちに何か尊いものを求められたら、そうなれる人となれない人ができ、なれない人は救いに外れてしまします。そうすると一切衆生を救うことはできず、悪業重き者はお助けに預かれないからです」

K「我が名を称えよというお言葉には私に何も要求せずに、私のあるのままを引き受けて助けるというお心が表されているのですね」
D「そうなのです。真面目になれといわれたら、真面目になることのできない、いな少しはなれたとしても続かない人間、人に優しくしなさいといわれたら、少しはできても続かない、今は愛しても事情が変われば憎んでしまう人間、嘘をつくなどい

れると、平生はつかないが大きな利害がからむと苦しまぎれに嘘を言ってしまうような人間、心をおだやかかと思っても、状況が悪くなると心が揺れ動く人間、心明るく生きたいと思っても、すぐ暗くなってしまう人間、これから気をつけますというその下から気のゆるむ人間、自覚したと思ってもいつのまにか元の木阿弥にもどっている人間、

仏法を信ぜよといわれても、疑いがはなれ得ず、信じることもできない人間、まあこういう具合に、何か私たちの心にしっかかりした真実なるものを求めても、

私の側からは何も確かなまことは出てこない、いつまでたってもあいも変わらずぬ心しかない人間、そういう人間を如来法蔵様はまず見られているのです」

K「どう求められてもどうにもなっていない、どうにもならない心を抱えて、苦しみ、憂い、流転している人間をこそ、如来法蔵様は見えておられるのですね」
D「そうなんです。そのような人間である私に、ただ称えるばかりで、助ける仕事はすべて弥陀がする」との仰せであり、私

のありべのままを引き受けたもう弥陀なのであります。全面的に引き受けて助けるというお心を「乃至十念若不生者不取正覚・我が名を称えよ」という念仏往生の誓いに示し、南無阿弥陀仏となつて喚びつづけてくださっているのです」

K「念仏往生の願に広大な阿弥陀仏の慈愛の心がこもっているのですね」
D「ええ、香樹院師の法語にも**或人香樹院講師へ申し上げて曰く。こんなところではと云うところが、はなれられませぬと。仰せに。その心だからよく聞くと、その心目当てに起こして下された御本願じゃ。**とあります」

K「お念仏称えていけば心がなんとかなるのでしようか」
D「それは聞き間違いです。なんとかならぬからこそ、その心そのまま念仏するばかりでいい

との仰せなのであります。『安心小話』という本の中に

或人、江州大浜の吉右衛門の婆さんに遇い、胸のもやくやを話せば、私もそうじゃ、たくさんあるが、そのまま積んで置く、天にもとどくだらうと思ふ。それをどうするかと尋ねたれば。

何をいうぞい、今死んでゆくものが、そんなものに相手になつておらりようかい。

とあります。この心にかまう必要はないのであります。ただ「助ける」という仰せを仰ぐばかりであります」

K「それでも本当に助けてくださるのだろうか、どうだろうかという案じる心が起こりますか」
D「これも香樹院師の法語に**香樹院講師いわく。助かるか助からぬかの案じげなしに、我をたのめの仰せじゃぞ**

とあります。私がいかほど案じてみても、私の案じようで変わる本願ではなく、私の案じることに関係なく、「いつまでたつても汝の心は定まらぬゆえ、定まっている弥陀の助けをたのめ」との仰せであります」

K「このような弥陀の本願の丸助けの大悲のお心が私に届いて弥陀の本願を信じるようになるのですね」

D「ええそうです。大悲の他に信心はないのです。大悲は仰せとなり、私における信心となつてくださるのです」(了)

歎異抄 第一章第四講

弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず。ただ信心を要とすとしるべし。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

(現代語訳)
(歎異抄第一章より)

阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人も分けへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。

*
阿弥陀仏の本願は老少善悪の人をえらばれず、といわれているのは、弥陀の本願は一切衆生を平等に浄土に往生せしめたい、それによつてすべてのものを仏陀たらしめたいという広大な阿弥陀仏のお心をお示めしになったものであります。老少ですから老いも若きも、男も女も、健康なものも病に伏せているものも、いかなる身であつても、身の状態であつても、分けへだて無く撰取の手をさしのべてくださる本願であります。

またここで善悪の人ともうされるのは、弥陀の光明は善人も悪人もすべての人をへだてなく「必ず救う」と喚びかけてくださっていることをお示しです。ただ、善悪の人といつてもこの世に善人と悪人という二種の人たちがいてというのではないでしょう。一人の人の人生においても、善を行うときもあり、悪を行うときもあり、善人になつたり悪

人になつたりの一生涯であり、また日常にも人をおもいやるような善い心も起これば、人を恨んだりねたんだりする心を起こすときもあります。善悪の人をえらばれずというお言葉で、弘くは善人悪人いかなる人もという意味で万人を救う対象としておられるし、深くは一人の人の全体の生き様の善い悪しに障げられず、引き受けて浄土に生まれさせようという大悲の願力が弥陀の本願であるとお示しでありましょう。

またある学者によれば、善悪の人というのは、当時の社会のなかで善人と位置づけられている人と悪人として差別されていた人のことを表すといっています。善人とはその当時の支配階級の人いわば貴族や武家などの上層民をいい、悪人とは被支配階級の人で農奴・漁師・猟師・商売人などの下層民を示しているといっています。そうすると弥陀の本願は、いわゆる社会の上の身分の上での善悪、そういう善悪の差別を立てないで一切の人を平等に撰取すべく働きかけてくださる本願力のおいわれをいうのだといわれていますが、そういう意味も含んでいると思います。

*
なお、この弥陀の本願の平等心について、花田正夫先生はその著『歎異抄』に『相對差別の人生のどこに、〈老少善悪の人をえらばれず〉のような、こうした平等にしてへだてないところがあろうか。国は是非善悪を争い、社会にあつては利害得失で競い、家庭にあつては老少新古の対立と、さばきの風はきびしい。世上の教えを聞いても、善人智者は歓迎され、悪人愚人はしりぞけられる。涅槃經によると、父を殺して王位に

いた阿闍世が、後になつて犯した罪の重大さに目覚めて大煩悶に落ちた。幸いに耆婆大臣と亡き父王の聲に導かれて、おぼろげと釈尊の前に出た時、「大王よ」と呼びかけられたが、大逆の身を仏が大王と呼ばれるはずがないと思つて、王らしい者を探して左右をかえりみた。釈尊は、おのが罪に障えられて疑いたためらう王を憐れまれて「阿闍世大王よ」と再び呼びかけられた。阿闍世は驚喜して「仏心平等にしてさらにへだてなきを知る」と踊躍し、「天界の楽しみも最早無用」と大満足している」といわれ、差別や対立や罪業に苦しんでいる衆生への仏心大悲の平等なる心を述べられていきます。

*
次に「そのゆえは」とありますが、この意味は「なぜ弥陀の本願は老少善悪の人をえらばれないのであろうか。そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の凡夫をこそ成仏せしめずにはおかないという深重大悲からおこされた本願だから」と申されるのであります。

すべての者を救うという本願ですから、この本願が焦点を当ててくださるのは必ずしも最も救われたい、永遠に浮かぶ瀬もない衆生でありましょう。自分の力で路を歩むことのできる人（自力修行の人）を対象に救う法でしたら、足腰の弱っている人は目的地（ねはん）にはいけません。元気な人ばかりかすべての人を目的地にあらしめようとすするなら、歩くこともできないような人かどうかしたら目的地に着かせることができるとか一番の問題になります。一切衆生の成仏を願ひ、どうしたらそれが実現するかを考えられるとき、足も

腰も立てぬ者（ここでは罪悪深重煩惱熾盛の凡夫）を助けるにはどうしたらいいかという風に、一番助かりがたい者に焦点をおいて救いの目的を立てられたのが弥陀の本願であります。七段ある重箱をすべて持ち上げようとすれば、一番下に手を入れて抱えねばなりません。すべての衆生を救う本願は罪悪深重の助かるすべの全くない者を救うという本願であればこそ、一切衆生が助かるのであります。ですから、罪悪が深重であり、煩惱が盛んで、罪悪の始末も煩惱の始末もつかず、憂苦しんでいる衆生を助けようとの願なればこそ、老少善悪一切の衆生が助かる道になるのであります。

*
弥陀の本願が老少善悪の人をえらばず、罪悪深重煩惱熾盛の凡夫を救いたもう本願であるといわれる、その思召しはどう本願に表されているのでありましょうか。

それは、第十八願に「乃至十念・若今生者・不取正覚」（たまた十声なりとも称えるばかりで、必ず助ける、もし生まれずば正覚を取らない）と誓われた念仏往生の誓いに一切衆生を平等に往生させてくださる大悲のお心を表してくださっております。このお心を聖人は和讃に「縦令一生造悪の衆生引接のためにとて称我名字と願じつつ若不生者とちかいたり」

『たとえ一生悪を行つてしまふような人々をも導きとるために、へわが名を称えよ』と願ひ、へもし生まれずば私は仏なるまい』と誓われた』と表してくださっております。（丁）

【初めての韓国4】

松広寺（ソンガンサ）は韓国仏教の中で禅修行の中心になるような寺であった。K師に案内してもらって光州からバスで一時間40分。曹溪山の麓にある。三宝（仏・法・僧）寺刹―仏の通度寺、法の海印寺、僧の松広寺―の一つ松広寺に ついた。この寺は新羅時代に創建され、高麗時代に入り普照国師知訥によって寺が拡大した。境内に書店があり入ってみると、日本人の仏教学者の書いた著名な本がいくつも並んでいた。仏教の学問では日本は進んでいるのであろう。しかし仏教としての宗教性となると日本が進んでいるとかどうか疑問である。通度寺・海印寺・松広寺は、どれも韓国では南に位置する。仏教徒も韓国では南部に多いとのことである。K師の後をついてまわったのであるが、K師は寺の中を簡単に回るだけだったので、私はじっくり見る事はできなかった。韓国の僧侶にとっては寺院はありふれているのであろう。私はいささか物足りなかったがK師について行く外なかった。松広寺の拝観を終わり、あとは順天に出てから釜山にいくだけとなった。K師は釜山まで一緒に行つてあげるといつてくれたが、私は一人で行けるということで、順天に行くバスターミナルでK師とお別れをする。K師はずつと私の荷物まで持って案内してくれたので、順天についてホテルで休んでいるとき、彼の親切心がずっと胸に残り結構寂しい思いが続いた。別れでも寂しい思いが残り、感情の始末に困った。翌朝、順天からバスで釜山に行き、その日はチャガルチ市場を見物して韓国式宿屋に泊まる。翌朝、飛行機で釜山から大阪に帰ってきた。この韓国旅行で感じたことは、韓国人が大変親切だったこと。有名な仏教寺院は美しい山間にあり、参詣の人たちは敬虔で、仏教信仰はかなり厚いものを感じた。キリスト教はもちろん盛んであるが、仏教が衰えているという感じはしなかった。日本より経済的

にはやや貧しいが、信仰心や精神性では日本よりも優れているという感じを受けた。(了)